

# 牧師たちの信仰ノート

## 第十回 「主の導きの軌跡」①

小学校五年生のときの十一月九日（水）の日記。

『夕方テレビを見ていたら『りんじニュースを知らせ  
ます』と言って、アメリカの大とうりようがどつちにな  
ったか教えてくれた。ぼくはケネディだろうと思つたら  
やっぱり当たっていたのでうれしくなった。ぼくがケネ  
ディをおぼえたのは、兄のとつている本を見たら、ケネ  
ディの生まれたことから今までのことがのつていたので、  
それを読んで、ケネディがなんとなく大とうりようにな  
ればよいと思っていた。石田先生（当時の担任）が言っ  
たこともあった。』

（その当時、毎日日記を書いて提出するよう担任に言わ  
れ、忠実に実行していたので、小三から小五までのほぼ毎  
日の行動記録が、日記として今でも手元に残っています。）

ここに書かれていることが、私の信仰生活の出発点です。  
クリスチャン・ホーム育ちではなかった私が、キリスト教

言われてしまうこともあります。確かにアメリカ文化へ  
の憧れがあり、日本の文化や政治には天皇制を中心として  
馴染めないもの（いつそ嫌悪感といつてもいい）がありま  
した。若いケネディが大統領としてさつそうと登場し、彼  
が「アメリカ初の〇〇のキリスト教の大統領」と紹介され  
たとき、同じ信仰を自分ももつてみたいと思い、キリスト  
教を自分の一生の宗教にしようと決断しました。クリスチ  
アンとして生きるなら、日曜日に教会に通わなくっちゃ。

それが、私が教会に通う決意をした本当の理由です。

ですから、教会に通い始めることにした日曜の朝、私は  
母に「今日は自分にとって大切な記念日になる」と宣言し  
て教会に向かったのです。

ただ、ケネディがアメリカ初の〇〇のキリスト教の大統  
領だと聞いて、キリスト教に旧教と新教があるのは知って  
いましたので、「初」だから当然新しいほうだろうと思い  
込んでプロテスタントの教会に行ったのです。彼が「ア  
メリカ初のカトリックのキリスト教の大統領」と知って自  
分の勘違いに気づいたのは、かなり後になってからでした。  
最初から正しい知識をもっていたら、近くのカトリック教  
会に通い始めていたことでしょう。

そのようにして、クリスチャンとして生きると決めて、  
そのために必要な行動として教会に通い始めたので、日曜

会に通い始めたのは、この日記から一年後のことでした。

なぜ教会に通い始めたのか。

家から小学校の通学路にキリスト教会があったので、実  
は教会の存在はずつと知っていました。

説教などでは聴衆の皆さんに笑っていただけるような理  
由に絞って語ってきました。「『教会ではクリスマスにはケ  
ーキをくれる』と聞いたので、ケーキ欲しさに、でもそれ  
がバレないように、少し前の十一月頃から教会に通い始め  
た」、「ボーイスカウトに入っていた小六の夏のキャンプの  
ときに川で溺れ、いきなり自分の死に直面し（少し大袈裟  
ですが）、人の生死について考えて教会に通い始めた」。ど  
ちらも事実ですが、本当の理由はもう少し別にあります。

私は、第二次世界大戦後のベビー・ブーマー世代（団塊  
の世代）の最後の世代で、アメリカの影響が色濃くありま  
した。「占領軍による日本人への洗脳が成功した世代」と

学校で教えられることをそのまま素直に信じ、次の日曜日  
には手持ちの小遣い三百五十円を使って聖書も購入して、  
朝と晩に聖書を読むようになりました。

たまたまではなく、クリスチャンとして生きる（クリス  
チャンがどういうものかはわかっていませんでしたが）と  
自分で決めたので教会に通い始めた、というのは、あまり  
にもエラそうなので、ふだんは「ケーキ話」で笑いをとる  
のですが、これが本当のところですよ。

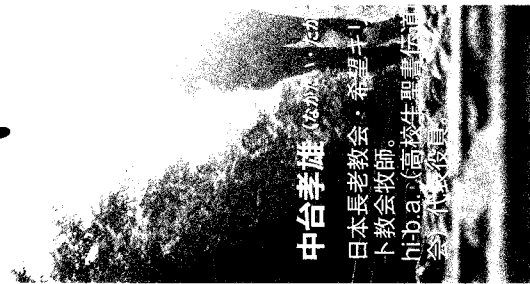
自慢話ではもちろんなく、神の憐れみがあったとしか言  
いようがありません。日本のひとりの少年を主なる神が憐  
れんで（プロテスタントの教会に導かれたことも含めて）、  
ご自分のもとに招いてくださったのです。教会に通うこ  
とが楽しみで、休むことなく毎週通いました。けれども、  
当時の日曜学校の先生に後日言わせると「何が楽しくて来  
ているのかわからず、もう来ないだろうと思っていると、  
次の週もやって来た」ということでした。

何を考えているのか、何が楽しいのか、わからないよう  
に見える少年少女でも、神はその子の心のうちに働きかけ  
て新生への動きを起こしてくださっている、今ここではな  
くとも、いつかどこかで実を結ぶ（かもしれない）。長い  
伝道生活で、実り少なくなつたときは特に、私がいつも自  
分自身のことを思い返し、心に刻みつけていることです。

中台孝雄 （なかのたけお）  
日本長老教会・希望キリスト教  
教会牧師。hi-ba（高校生聖書伝道協会）  
代表役員。

# 牧師たちの信仰ノート

## 第十一回 「主の導きの軌跡」②



四十代の頃、一度だけ、中学二、三年の時の同窓会がありました。

こうした同窓会では、皆それぞれ断片的な記憶しか持っていないため「言ったもん勝ち」で、当時についての発言を否定も肯定もできないのですが、私が牧師をしていると知った友人から「そういえば、おまえはあの頃から牧師になると言っていたからな」と言われました。

そんなことはないはずだ、中学生の頃の自分は映画監督になりたかったし、そう口にしてははずだ、と思ったのですが、「びよっとして、そんなふう言っていたのかもしれない」という疑念を、自分で否定することもできませんでした。

そのクラス会は、静岡県島田市で行われたものでした。中学二年になるとき、父の仕事の関係で千葉県から静岡県に引っ越し、二年間その地の中学校に通っていたからです。

地元の教会に毎週出席しましたが、のんびりした田舎

になってしまう子どもたちも多い中で、中学時代に信仰を貫いて戻って来た高校生がうれしかったのでしょうか、数週間後のイースター礼拝で、念願の洗礼を受けさせてくれました（勉強会や試問なしに！今では考えられないことですが）。そして教会から「毎週木曜、EBCA（当時の表記）という高校生の集まりがあるから行ったらいいよ」と勧められ、部活に早くも挫折した五月に行ってみました。

私が行った千葉集会の担当は堀内顕スタッフで、「今週が最後で、来週から大阪の八尾というところで牧師になります」とのことでした。私は、わずか一回、数時間の集会でしたが、正真正銘、堀内先生のEBCAスタッフ時代の「最後の教え子」ということになります。

その後、高校時代三年間、定期集会に、特別活動に、キャンプにと、EBCAの活動に参加して、信仰の友を得、信仰が養われました（高一の夏キャンプの部屋カウンセラーが、このシリーズの前回執筆者の太田和功一先生。そうした中で、直接伝道への献身の決意をし、映画や芝居を観ることもやめ、蓄めていた映画関係の資料や貴重なパンフレットなどをすべて捨てました。

振り返ってみて、自分の信仰生活の中ではかなり「原理主義的なキリスト教徒」の時代でした。

その後、何年もしてから、趣味は趣味として自分の人生

（とそのときの私は思った）で、特に勉強に力を入れる必要もなく、日曜日は礼拝が終わるとそのままパンを買って映画館に行き、夜の最終上映までずっと映画を見て過ごしました。

その頃は、将来映画監督になりたくて、東京から映画の専門書やシナリオ雑誌を取り寄せて読んでいました。キリスト教の証しになるような映画を作りたいと思っていたので、牧師という選択肢も考え始めていたのでしょうか。

中学卒業が近づいた頃、父が上司から「息子さんを千葉のほうで受験させておくように（まもなく転勤で千葉に戻ることになるから）」と示唆されたようで、母に連れられて、受験のために静岡から千葉に通い、無事高校に合格して、春休みに千葉に戻り、高校生活が始まりました。小学校から中学一年までの友人たちの多くも同じ高校に進学していて、再会しました。

教会も元の教会に戻り、引っ越しとともに消息が不明に

に取り戻すことになり、一般恩寵の世界も大切にすることを知るようになるのですが、一度自分の手を開いて、捨てるべきものは捨てるという経験は、人生に必要な訓練だった、と感じています。

EBCAで信仰の養いを受けたことから、神学校を経て伝道者となり、二十代から三十代初めまでスタッフとして働きました。初任地である神奈川地区での三年間は、特に自分にとっての青春そのものであり、出会った高校生たちとの思い出は強く心にとどまっています。その後、二年間の関西地区の担当を経験して、再び関東担当に戻りました。できれば年を重ねても高校生伝道を続けたいと願っていたのですが、あるとき唐突に、そして強引に、その働きから引き離されました。仕方なく（当時の気持ちです）、やりたいとなど、まるで思っていなかった地域教会での牧会に従事するようになりました。今振り返れば、主なる神がご計画に沿ってご自身の働き手に対して、強制的な形であれ人事異動を発令なされたのだ、とわかります。

牧師の仕事は、ほぼ三年間で送り出す高校生伝道とは違い、信徒の皆さんと長く人生を共にする働きでした。幾人もの聖徒の方々を天にお送りし、「牧師の仕事とは、あちこちの病院のどこに霊安室があるかに詳しくなる働きだ」と思ったりもしたものでした。

# 牧師たちの信仰ノート

## 第十二回 「主の導きの軌跡」③

できれば生涯続けたかった高校生伝道から離れた私に、特にやりたいことはありませんでした。ですから、「自分からは何も選びません。あなたが私を用いたいとお思いになり、何かお命じくされれば、それを一生懸命やります。何も命令がなければ、自分の好きなように生きています」というのが、当時の気持ちでした。(そして、今でもその気持ちはあまり変わっていません。決して人に勧めることのできる生き方ではないのですが)

地域教会の牧師としては、今に至るまでコツコツと、可もなく不可もなく、でもそれなりに真剣に心を込めて続けてきていると思いますが、今回はこの面には触れません。

日本福音同盟(JEA)との長年の関わりも、偶然というか、私の選んだことではありませんでした。私の奉仕していた地域教会が所属する教派では、JEAの担当は他の先輩牧師でしたが、総会を目前にして病気になるや、急ぎよ、私が代理で行くようにと求められて参加したのが、関

そのようにして、二十代のことは遠い思い出になり、一地域教会の牧師として素朴に生きていた私に、E.F.O.A.(その頃は、表記も小文字になっていました)から「宗教法人としての責任役員会の一員にならないか」との連絡が入りました。高校生伝道から離れてすでに四半世紀、二十五年も過ぎ、地域教会の牧師として、超教派の伝道団体であるE.F.O.A.とは礼儀正しい関わりをもつてはいたものの、個人的な接触はなく、自分の心の中で過去の思い出として仕舞い込んでいたことでした。現役のスタッフたちのこともまるで知りませんでした。

声をかけてくださった、当時の代表役員であった故・吉枝隆邦先生に「どうせ戻してくださるなら、もつと若い時に現場のスタッフとして戻してほしかった」と無茶なことを言ったのですが、それは厚かましくも、主なる神に対するヨナのような不平でもありました。そうは言っても、あのときはあれで限界だった、あれ以上続けることはできなかった、とは自分でもわかっていました。

何人かの先輩の牧師たちに相談し、「召されていると判断するなら、やりなさい」と諭されてお引き受けし、いきなり代表役員として(地域教会の牧師という立場での外部奉仕としてですが)二十五年ぶりに戻ることになりました。

四半世紀ぶりに戻ったE.F.O.A.で、集会活動やキャンプ

わりの最初でした。そして少しずつ関係が進み、援助協力委員会(当時は救済委員会)で長年委員を務めるようになり、理事として何期も奉仕させていただく形になりました。

教会学校教案誌『成長』で、あちらを書き、こちらを書きと(自分では「隙間産業」と称しているのですが)執筆を続けてきましたが、これもきつかけは『成長』編集部から「だれか執筆者を緊急に紹介していただけますか」とある牧師に電話がかかってきたときに、たまたま私がそこに居合わせただけのことからでした。何冊かの本の翻訳にも関わらせていただきましたが、これもきつかけは、私が英語ができると勘違いした、すぐ書房の故・有賀寿先生から「この本、訳してこらん」と声をかけられたことです。

その都度、自分にできる精いっぱいのことをしてきたのは確かですが、どれも自分で選んだり、「やります」「やりたい」と名乗りをあげたりしたことではなく、主なる神が私に「これをやれ」ともつてきてくださったことでした。

などの折々に顔を出すようになると、私がスタッフだった頃の高校生たちの子どもによく出会いました。考えてみれば二十五年という歳月は、高校生が大人になり、結婚し、子どもが生まれ、その子どもがちょうど高校生になる年月でした。ですから出会って当然なのですが、スタッフを離れて以来まったく連絡をとらず、消息を知らなかった高校生たちの子どもに会わせてくださったのは、主なる神がわれみによって与えてくださった「ビギナーズラック」だったのでしょう。代表役員として十数年経った現在では、そうした「特別サービス」の出会いはずっと尽きました。

私たち伝道者は、神に仕えるしもべです。時には自分の願うところではない場所や働きに遣わされます。神は、私たちの内にある、何かに惹かれ、何かにしがみつく心のあり方を知っておられるので、強引に人事異動を発令なさることもあります。けれども、私自身の人生に与えられた導きの軌跡を振り返って、結局はそれでよかったのだな、そう懐かしく思い出します。そして、生きているかぎり、導きはこれからも続くのでしょう。

「あなたの道を主にゆだねよ。

主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」

(詩篇37:5)

中台孝雄 (なかだい たかお)  
日本長老教会・希望キリスト教  
教会牧師。  
Inaba (高校生活聖書伝道協  
会)代表役員